

会長としての2年間を省みて

南山大学 教授 長谷川 利治



日本オペレーションズ・リサーチ学会会長の重任を仰せつかって以来2年がたち、あまりお役に立てなかったことを申し訳なく思っております。しかし、学会の運営方法の改正など、理事の皆様や事務局の方々のご指導、ご協力を得て出来たことを喜ばしく存じています。皆様に心からお礼申し上げます。

会長をお引き受けした際、我が国におけるオペレーションズ・リサーチの活躍が、かなり長い歴史、多くの優れた業績にも関わらず正当に評価されていないことに如何に対処すべきかを考えることを提案いたしました。皆様はどのようにお考えでしょうか？

本年4月初めに、某大銀行におけるシステムが破綻しましたが、オペレーションズ・リサーチという学問、しかもきわめて実用的な学問を理解の方が意思決定をなさる方々のうちに一人でもおいでになれば、2年半有ったといわれる準備期間中に、破綻をさけるシステム設計が出来ないということにはならなかったように思います。

現代の社会において、ことにビジネス社会においては、「我々が得ることの出来るものは、我々がそれを得る資格が有るから得られるのではなく、交渉することによって得られるものである」といわれています。すなわち、こちらから働きかけなければ、期待したものは得られない、と思われれます。学会等専門的な場での発表のみでは不十分であることを私どもは肝に銘じなければなりません。

それでは、私どもはどうすれば良いのでしょうか。会長をさせて頂いた際、日本のオペレーションズ・リ

サーチ関係者は、もっともっと自己顕示能力を高めなければならぬと提案いたしました。私どもは現実問題を出来るだけ客観的に理論モデルを作ろうとし、理論的な精緻さを追求するあまり、理論の限界にすぐ気がつきます。深く知れば知るほど謙虚になってしまいます。よく分かれば分かるほど自己顕示、自己主張が困難になるように感じます。

さらに、多くのオペレーションズ・リサーチ問題は、その問題の解決に失敗したときに表に現れてきます。一方、前もって十分問題を予測し、対策を立てて成功した場合は、問題が有ったことすらも現れてきません。私どもはいろいろな問題に対して、「なぜ失敗したのか」を知らせることはもちろん、「なぜ成功したのか」も人々に知らせなければならぬと考えます。私どもが適切に自己顕示・主張をし、社会的な存在をより多くの方々に認識して頂くよう努めなければならぬと思っています。ビジネス社会と同じで、こちらから理解を求めるように社会に働きかけていかなければ、いくらすばらしい功績を挙げてみても気づかれぬままになる可能性が大きいと思います。

学会としての自己顕示の方法はいくつも有り、多くの方々が努力を続けてこられていることは明らかですが、何か新機軸を打ち出す必要が有りそうです。日本オペレーションズ・リサーチ学会のさらなる発展のため、小笠原会長のスローガン「戦うOR」のもと、皆様のこれまで以上のご指導、ご支援をお願いする次第です。